

## 国際シンポジウム／ワークショップ 開催にあたって

2011年3月11日、日本は大きな地震と津波を経験しました。これから何年もかけて復興に取り組むにあたって思い出すのが、2004年12月26日に地震と津波によって大きな被害を受けながら、被災から7年たった現在、復興を進めているアチェのことです。

災害は不幸なできごとですが、アチェと私たちとを結びつけるきっかけともなりました。この関係を一時的なものにせず、より強く、そしてより長い関係にしていけるためには、私たちそれぞれの災害や復興の経験を共有する必要があります。私たちの経験は、日本とアチェだけでなく、これから災害を経験する世界の他の国の人々にとってもきっと参考になるに違いありません。

災害は、建物をこわし、人命や財産を奪うだけでなく、情報にも被害をもたらします。私たちの記録や記憶のよりどころとなる博物館や文書館、景観、文化・芸能の担い手に大きなダメージを与え、被災前と被災後の社会のあいだに断絶をもたらします。他方で、断絶した経験や、被災前と被災後の歴史を結びなおし、社会の連続性を回復させるのも人びとの記憶です。被災後に私たちは復興という新しい経験をしながら、さまざまな情報を再び集めたり、見直したりしながら新たに社会をつくりなおしていきます。ただし、復興過程のただなかでは、ともすれば大量の情報が十分に整理されないうまま放置されることになりかねません。そのような形で保存された情報は、一つ一つの情報には価値があっても、社会の中に位置づけられず、他の人が利用できません。

これを解決する一つの方法は、地域情報学の活用です。地域情報学を用いると、さまざまな種類の情報を同じプラットフォームの上に載せて相互に利用可能な形にすることができます。たとえば、地図の上に写真や文書といったさまざまな情報を掲載し、一目で地域の概要を示すことができます。単に多様な情報を集めて地図に載せるだけでなく、それらをいろいろなテーマに沿って活用することもできます。本シンポジウム・ワークショップで紹介するアチェ津波モバイル博物館は、地域情報学を観光開発に活用する試みであり、2011年に観光年を迎えたバンダアチェ市の人々と考えてきた成果を形にしたものです。また、将来的には、「小さな災害」に関する情報を蓄積することで、社会不安や治安の悪化といった社会問題の発生を早期に警告する「社会問題アラート」の仕組みを作り出すことも考えられます。

本シンポジウム・ワークショップでは、インドネシアやアチェの実情に即した情報整備や、それをもとにしたアチェの創造的復興を考えます。地域情報学の知見を生かした創造的復興に取り組むには、アチェに関わるそれぞれの人が関心や専門性に応じてどのようにシステムを活用したいのかを考える必要があります。また、情報を提供する人びとの協力も欠かせません。アチェで災害地域情報システムが機能するようになれば、アチェ社会あるいはインドネシア社会をいっそう発展させていくための道具となるでしょう。

本シンポジウム・ワークショップは、JST-JICA地球規模課題対応国際協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」、シアクアラ大学津波防災研究センター、京都大学地域研究統合情報センター、科研費プロジェクト「災害対応の地域研究の創出：『防災スマトラ・モデル』の構築と実践的活用」の共催により開催されます。6日間のシンポジウム・ワークショップが実り大きいものとなることを願っています。

2011年12月21日 バンダアチェ

JST-JICA地球規模課題対応国際協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」グループ4-2「地域文化に即した防災復興・概念」課題担当者

京都大学地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクト 災害データベース担当者

京都大学地域研究統合情報センター「災害対応の地域研究」プロジェクト 研究代表者

科研費プロジェクト「災害対応の地域研究の創出—『防災スマトラ・モデル』の構築と実践的活用」研究代表者

山本 博之